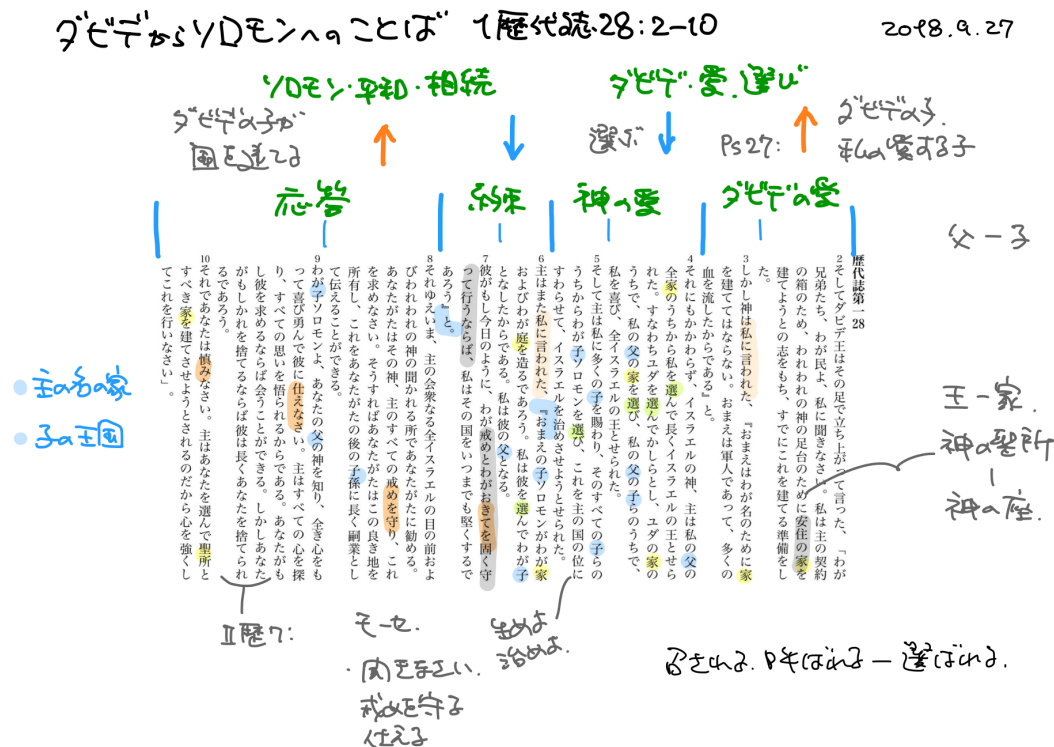




1 歴代誌28章

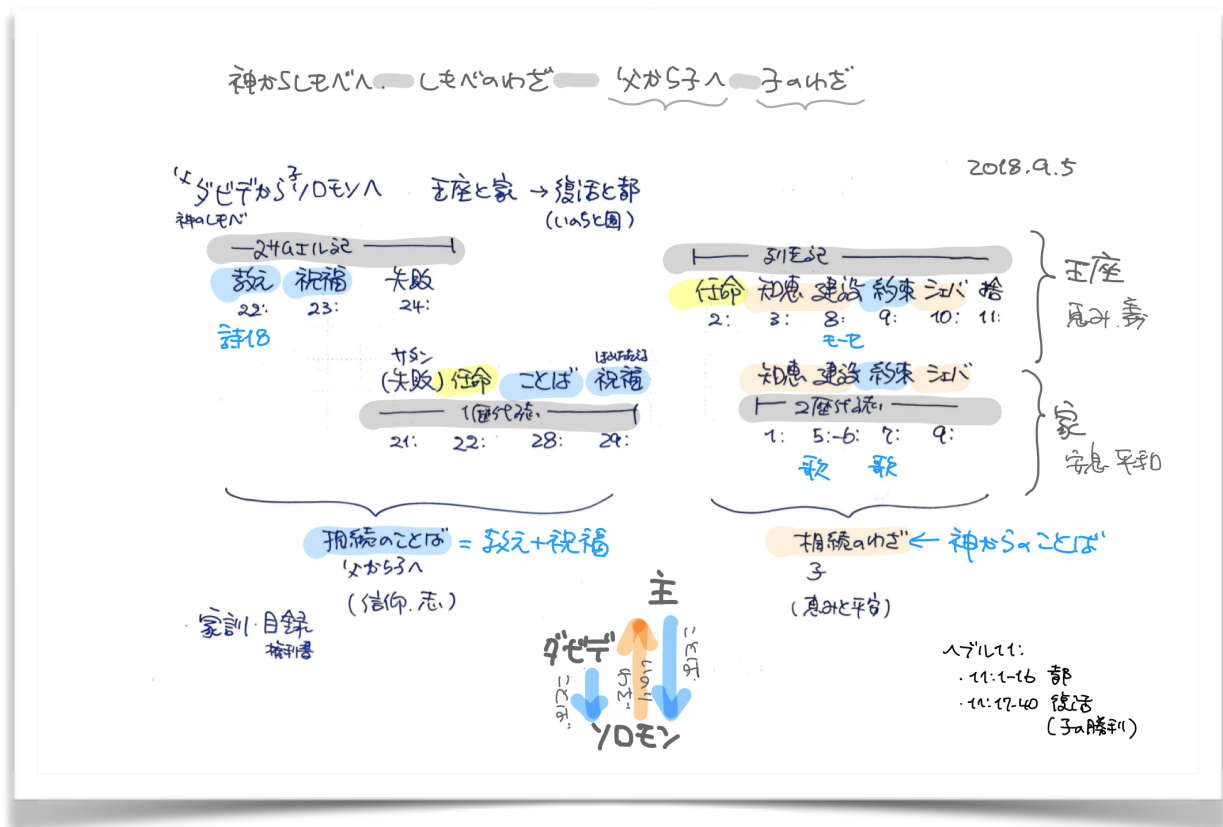
ダビデからソロモンへ



第1歴代誌28章2節から10節、ダビデの最後のことば。最後とはここには書いていませんけれど、「最後のことば」を分析してみました。

モーセからヨシュア、ダビデからソロモンというこの戦いの中で、モーセからヨシュア、ダビデからソロモンへの最後のところ、ソロモンに相続するところをもう少し詳しく見ると、サムエル記・列王記側と歴代誌側で、似ている、同じ時のことを別の観点で説明してくれていることになります。サムエル記・列王記は「王の歴史」、歴代誌は「家の歴史」というように分けられるでしょう。

今見ようとしている第1歴代誌28章は、ダビデの最後の相続のことばと相続の祝福。サムエル記のほうでの最後のことばと言われているのは、詩篇18篇です。第2サムエル記22章の詩篇18篇の教えと23章の祝福のことば。これが、王側です。歴代誌のほうもことばと祝福がありますけれど、28章に書いてある主の家との関係でのことばという位置付けになっている相続のことば、父から子への相続のことばというのが、28章の2節から10節までということです。



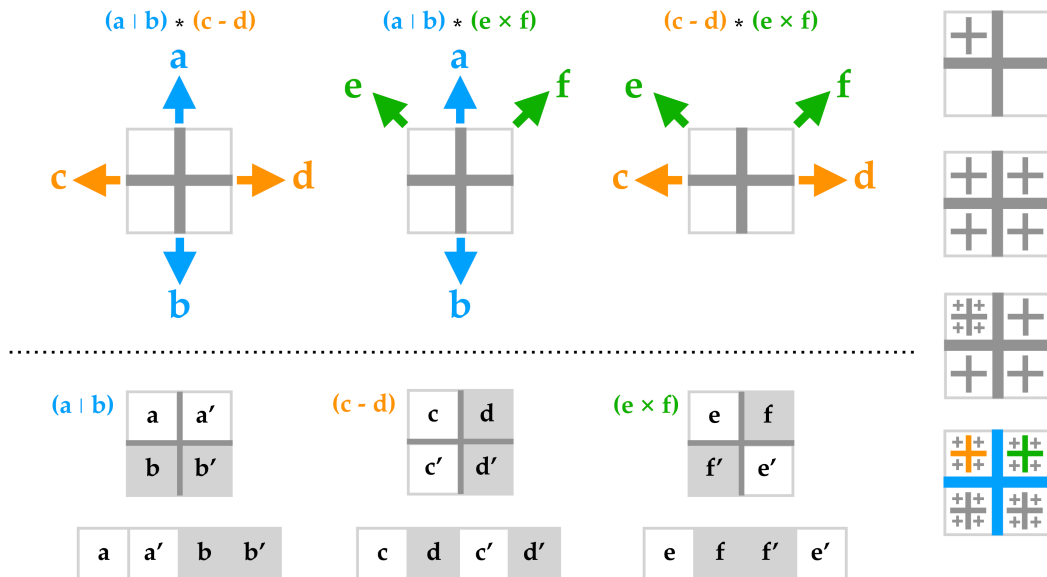
いろんな繰り返しのことばがあります。「父、子、選ぶこと、ダビデ、ソロモン、戒めを守る、戒めを守る、神様が言う、神様が言う、家、家、聖所、家、志、全き心をもって悟ること」というキーワードを、繰り返しのことばを見ながら分けましょうということですね。

例えば、分けてみると、2節から4節が「ダビデについて」、5節から7節が「ソロモンについて」、8節が「民に」、9節10節が「ソロモンに」というふうに分ける人がいました。たぶんここをざっと読んだときに、最後の民に命じるところ、ソロモンに命じるところというのが目立ったからかなと思います。それで、民に対して、ソロモンに対してと。そこをまずセットと思って、他のところを分けてみるということを、この分けた人は思ったのだと思います。

ハウス、家といったときに2つ意味があります。見える家の話と、家族・家系・王朝。ダビデの家というときに、家の建物も指しますし、ダビデ家のことも指すわけです。同じようなものだと思いますけれど、そのダビデ家という意味では、ダビデ王朝について話す話と神殿について話す話です。けれども、ここにも神殿の話があるから、違うのかなというように分類していくわけです。

The Divine Symmetry of the Bible

The literary structure of the Bible is a multi-layered structure of four quadrants.



(c) Kazuhiko Kanno / 2018.9.13

分類していくときに、最初に2つに分けてみましょうというような話をするのですが、こちらの図。前半後半、もしくは真ん中に2つ似ているものがある。cdcdという繰り返しが2回続いているというように見る、このどれなのかなと、どれが見えるのかを4つに分けてみて、この組み合わせかなというように分けていってみてください。

abcdと書いてあるのは、これが対語になっているような感じですね。例えば、父と子。父について、父について、子について、子についてとか。その対になっている、王と家、王座と家とか。このように当たりをつけてという感じで、もしかしたら、こっちは父で、こっちは子かもしれないというように自分が知っている大切な対語、今までに知っている対語、ダビデとソロモンとか。そういうキーワード、対語を使って分けてみるということです。

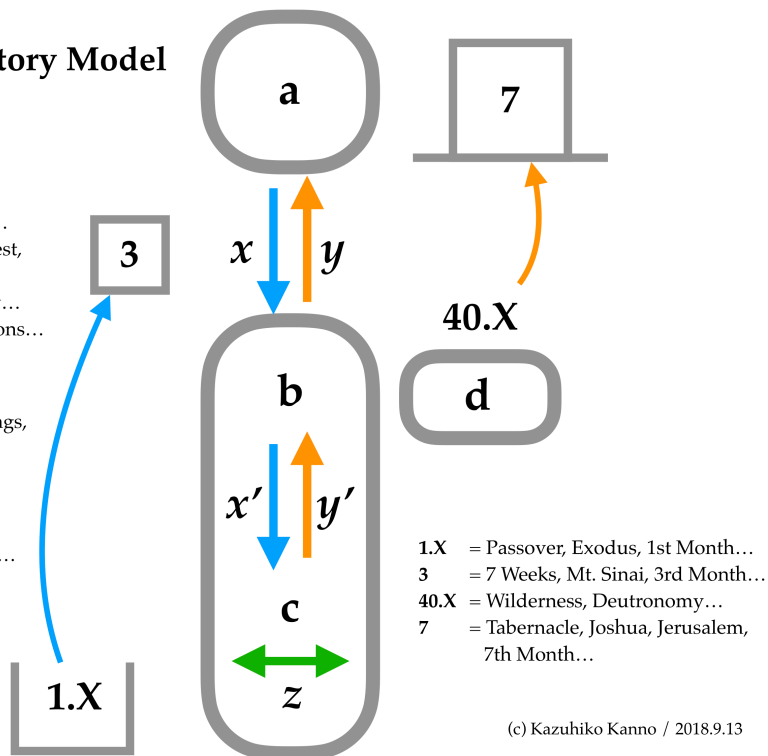
The Covenantal Story Model of the Bible

a = Abba, God, YHWH, Father...
b = Ben, Son, Servant, King, Priest, Leader, Head...
c = Church, People, Israel, Body...
d = Dragon, Devil, Enemy, Nations...

x = Word, Comandment, Blessings, Curses...
y = Belief, Prayer, Song, Thanksgiving,...

x' = Wisdom, Judgement, Guide...
y' = Obey, Faithful...

z = Love, Fellowship...



分けるときに、その対語の見方がこちらの表です。祭りの流れ、もしくは契約の愛の関係。神様と民、神様が何をしてくれるのか、民が何をするのか。神様が何を言うのか、民が何を言うのか。その民の中で、また王様が民に、民が王様に…というこの契約関係ですから、契約の愛の応答としてその関係、第1歴代誌28章もどちらについて話しているのかなということで見るともう少し分けやすい、関係が見やすいのかなと思います。



してくれるという神様は、民に対して約束をくれるわけです。その約束はソロモンに対して言われ、民がその戒め、ソロモンと同じようなものですね。王様と民は一つですから。王様が言われたように言うならば、民のその国はいつまでも固くされるという約束。それで、その約束を信じて民が応答するなら、国が栄えます。ソロモンが応答するなら家を建てるという特別な働きを果たすことができますということです。

最初のほうは、ダビデの愛に対して神様はダビデを愛してくれているという私の愛する子ダビデの子を与えるという話と神様は約束してくれて、その約束に応答するということです。この約束は、平和の約束、相続の約束、安息の地を約束するというような感じですが。前半の5節までは特にダビデの愛。選ぶ、子とする。その子なので、6節から10節で、平和を受け継ぐ、長く生きる、長く治める、とこしえまでという応答になっているのだろうと。

「命令を守りなさい、仕えなさい」というところと、「聞きなさいイスラエル」というところ。これは、モーセがヨシュアに相続するところで、その命令を守り行いなさいといったところを思い出す言い方だと思います。

このもとともソロモンが家を建てると言われたのは、第1歴代誌22章でソロモンが任命される。そこでも同じ話が出てきています。主の家を建てる、その場所が決まって、その家を建てるのはソロモンだという話をしているところです。ここを見ても同じようなことがありますけれど、ここに「モーセが命じた定めとおきて」とはつきり書いてありますので、モーセからヨシュアへということは、ダビデからソロモンへというストーリーの並行があるということです。

それは、1,3,40,7でいうとこの40の終わりのところの相続ですね。7に入るための相続の箇所なので、エジプトから出てカナンへの地に入ることと、ペリシテ、古いエフライムの天幕から新しくダビデの天幕、そしてソロモンの神殿へというストーリーが並行しているということがこういうところからわかると思います。相続のところですね。

ですから、ここ(22章)に「強くあれ、雄々しくあれ、恐れるな、おののくな、主が共にいる」というヨシュアのときに言われた皆がよく知っている言い方が、28章の中にも出ていますということです。主が共にいるというのが、主の家に住むことができるということではいばん現わされるものですので、そのことがここで言われています。28章のこのあとのところで、直接ダビデはソロモンに言います。「心を強くし、雄々しくあって、これを行いなさい。恐れてはいけない。主が共にいるからだ。」と言っているところが28章のことばのあとにもう一度続いています。

その相続のことば。ダビデからソロモンへの相続のことばに「愛と平和」の約束が、モーセからヨシュアへ、ダビデからソロモンへ、そして神様から民へという約束の中心なのだということがこの分析からもわかるかと思います。